

研究と教育のバランス感覚

— 職場としての大学 —



京都大学大学院理学研究科化学専攻 助教授

板東 俊和 ばんどう としかず

1998年に徳島大学を卒業し、故郷の徳島から旅立った時から9年の月日が流れました。その間、米国—東京—京都と移動を続け、天然物や機能分子の合成と評価に関する研究を一心に続けてきました。思えば、周囲の大きな環境の変化に伴い、年々立場が変わり落ち着く間もない生活を送っていました。幸運にも、2004年から京都大学大学院理学研究科に異動する事ができ、最近、ようやく自分の研究だけでなく、学生への教育・指導について考えることが多くなってきました。特に昨年度から大学で基礎有機化学や生物化学の講義の担当をはじめたことで、学生の教育に携わることが

大学で働く上での重要な責務になりました。

徳大から京大への道のり

大学で働く意義

助手、また助教授として大学で働きはじめてから5年過ぎましたが、現在も講義の準備には苦心しています。大学生として講義を受けます。立場から想像する以上に、教壇に立ち90分間の講義を行なうことは簡単な仕事ではなく、講義の内容を判りやすく正確に伝える話し方や板書の仕方に関して常に試行錯誤を続けています。もちろん、試験問題の作成やその採点にも多くの時間と苦労を費やしています。月並みな

言葉ですが、プレゼンテーションとコミュニケーションの能力を色々な場面で求められる仕事だと思います。また、様々な研究費等の申請書・報告書等を作成することも日常的に発生する業務です。加えて、所属している研究室では、新しい研究計画を立案する事、研究指導している学生と実験結果について議論する事、研究成果を論文として執筆すること等の研究活動も行なっています。その中でも、大学独立法人化の影響による研究室の管理運営の煩雑さと難しさを感じる事が多くなりましたが、それらを含めても「大変な仕事」だとは感じていません。何故なら、後進の学生と共に自分がやりたいこと「研究」を実践できる仕事だからです。将来的に、多くの先人より受け継いできた知識・技術・精神を伝えて、学生を社会人として送り出すことができれば、教育者として大学で働いている意義があると考えています。



学生へのメッセージ

略歴

- 1970年生 徳島県小松島市出身
- 1992年 徳島大学薬学部卒業
- 1997年 徳島大学大学院薬学専攻博士課程修了
- 1998年 米国Scripps研究所 博士研究員
- 1999年 東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 CREST博士研究員
- 2002年 同大学 生体材料工学研究所 助手
- 2003年 同大学 大学院疾患生命科学研究所 助手
- 2004年 京都大学 大学院理学研究科 助手
- 2005年 同大学 大学院理学研究科 助教授
- 現在に至る

ー

最後に在学生の皆様へのアドバイスとして「小さな目標を常に設定すること、その小さな目標の達成を続けること」の重要性を提案します。実際に、努力することの全てが報われるわけではないのが人生ですが、努力することは目標実現に向けた必要条件だと思います。小さな目標達成の積み上げなくして、人生に関わる大きな目標の達成に繋がりません。一生勉強、日々精進です。